

---

# スタパン

伊東ゆさ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スタバン

### 【Nコード】

N1755D

### 【作者名】

伊東ゆさ

### 【あらすじ】

リストカッターの加藤由比。平凡な日常を送る増岡竜平。母親から虐待を受けている長谷川孝。心臓の病を持っている吉岡恵。4人のバンド生活を描いたシリアスかつギャグ青春コメディー時々恋愛？！的な物語。

## ボーカリスト、加藤由比の話

（飛行機雲みたいだね）

赤い血が連想させた。

飛行機雲のようにつつ。と細い線を描いている様子は由比にはきれいに見えた。

他人から見たらきつと異常行為なのだろうけど。

由比がリストカットしている理由は、死にたいという気持ちからではない。

ただ、うまれてきてごめんなさい。そういう気持ちからのものだった。

自分の存在はただ、この世界には不必要なもので。

作られた骨や血や肉や脳などは、すべて自分にはいらぬものだ。

（返すよ、空に）

．．

今日はまだきつていない左手首を支えにして立ち上がり、飛行機雲のような血が流れている右腕を空に見せるように上げる。

果たしてこの体が何かに役立つことがあるのだろうか。

実現しそうにない妄想にくすりと笑った。

「馬鹿みたいだね」

n e x t

始まりはじまり。

## ギタリスト、増岡竜平の話

平凡です。

はい、平凡ですよーっだ。

ってゆうか。

特別な日常を送ってる子なんか、いますか!?

みんな、平凡が一番だなんて言うけれど、

俺はそうは思わない。

人間、一度はカッコいいと思われない。

人間、一度はものすごい恋愛してみたい。

人間、一度は人を感動させてみたい。

そうでしょう!?

「ねえ!佐藤先生!!!?」

「おー。そうか。増岡。お前は一度はテストで80点以上いって先生を感動させてくれないか」

くそう!やはり先生に俺のアイデンティティーはわかってもらえないんだな。

あ、どうも。増岡竜平です。

ごく普通の、男子中学生です。

まあすこし変わってるといえば僕の髪の色、おばあちゃまが外人。それくらいです。

ちなみに髪の色はオレンジだけど、目の色は黒。

僕は大変中途半端なDNAを受け継いだらしく、父さんのように目までオレンジではない。

って俺誰に説明してるんだろう。

ああ先生が睨んでる。

「よし、増岡。お前罰としてあの赤いギター持ち帰ってくれないか。先生アレ邪魔でしょうがないんだ」

持ち帰るだなんて、そんな、拷問だ！

「とうかな、増岡。学校には不要物は持ちこみ禁止なんだ」

「不要物じゃありません！アレは俺の魂なんですっつう！！！」

ぎろり。

うあ。

「持ち帰れ」

「…あい」

そんなこんなで、だ。

なんという教師だろう！

生徒の趣味を極限まで伸ばし、それを活性化し、生徒のいいところにすべきなのではなかるうか？

昼休み、一人とひとつで屋上に向かう増岡竜平、今日の名言…とははは。

持ち帰る前にもつかいだけ、野外練習だ。

もちろん、あとで先生に許しをもらいまたもってくるけどね。

俺はあきらめないのだよ、佐藤センセ。

扉の前まで来て鍵がないことに気がつく。

しまった！校内鍵マスターの海棠君にもらつのを忘れていた！

なんと言っミス！

どうしようか。あきらめるか？

なんてね！ナンセンス！こんなことであきらめる増岡君ではないのです。

こんなときこそ女子からもらったヘアピンでございますよ。

はっはっは。増岡竜平、初のピッキング。

いざ、挿入！！

鍵穴にヘアピンをいれて、適当にかき回す。

つて、こんなんであくわけないでしょ。

「くそう」

あきらめるしかないのか。

ため息をつき、ドアノブに手をかけ立ち上がる。

がちゃ。

あれっ？成功、したの？！

扉が開く感触がした。

悪いことをした、という罪悪感より、成功したという喜びのほうが大きかった。

重い扉をぐつと押す。

ぶわつと風が増岡に向かって吹いた。

（い、目にゴミッ…！）

必死で目をこする。

だがいたみは増すばかりだ。

（あ、そういえばこういいうときって涙を流せばいいんだっけ？）  
ぱつと目を開く。

涙で視界がぼやけた。

それを学ランの袖で拭う。

視界がはっきりとした。

（なっ…）

その瞬間、奇妙な光景が増岡の視界に入った。

セーラー服を着た少女が仰向けに寝ているのだ。

ああ、人がいたのか、そういう思いもあり驚いたがもっと驚いたのは、

その少女が手首を切っていたことだった。

（あ、ああいうのって、なんていうんだっけ？）

最近深夜のテレビ報道でやっていたのを思い出す。  
確か、

（リスト、カット…？）

自殺願望者。

あの少女は自殺願望者なのだ。

（う、そ…！）

自分とはあまりにも次元が違いすぎるため、吐き気がした。  
もしかしたら彼女はいま、自殺しようとしているんじゃないだろうか。

増岡は息を呑んだ。

止めたほうがいい、良心がそう告げた。

（そうだよな！ぜ、絶対、止めたほうがいいよな！）

増岡はぐっと両こぶしを握り、彼女へ近づいた。

「あ、」

声をかけようとしたとき、少女が息を吸う音がした。

「すうつ…」

増岡の足が止まった。

少女が突然歌いだしたのだ。

「

」

(すい...！)

歌詞は英文でよくわからない。  
でも、とにかくわかるのは、

(きれい)

澄んだ声。

はつきりしていて、心臓まで届く。

そうか、このこはきっと人を感動させることができる子なんだ。  
俺の目標としたことを、このこは知らないうちにしてるんだ。  
すごい！すごい！

「すみません！俺と一緒にバンドやりませんか！」

ごめん、口が滑りました。

幼馴染？

前回、増岡竜平、口が滑りました。

「は？」

「……………」

視線が痛い。

ごめんなさい。

快樂の時間を邪魔してごめんなさい。

決してあなたの邪魔をしようと思ったわけではございせん。  
ええ、そうですとも。

勝手に出た声が悪いです。

ええ、ほんと。

「リストカットって痛くない？」

ああ、またやってもーた。

どんな質問だよ。

「…べつに。ずっと切るだけだし」

君もそう簡単に答えるんじゃないやありません。

女の子はすつと体を起こした。

不健康そうな体だ。

全体的に細くて、まっしろ。

白いアスパラみたい。

「さっきの、バンドとか、何？」

え、

ああ。さっき俺そんなこと口走ったんだっけ？

おお、さっきいったことも忘れるなんて俺の脳もそろそろピークかな？

「実は、」

待て。

君の声がきれいだったから、なんて言ったら告白みたいだろ……！！  
馬鹿馬鹿！アホ！まだ会ったばっかなのに！

ってゆうかこのこ、よく見るとすげー整った顔してんな。

目はきらきらしておつきくて睫毛で影ができるくらい長い。

って何考えてんだ……！！

俺は下心があつてこのこを誘うわけじゃないよ……！！

声！声に惚れたから……！！

「実は、俺バンド部目指してて……」

なんて言い訳をだしてみる。

どうだ、食いつくか……！！

「……ふうん。何で今頃？」

「え、あの、わかんないけど……」

とっさの言い訳に理由なんてありません。

理由を考えてみる。

うーん、えーっと、なんででしょ…。

なんて考えているあいだ、いつの間にか彼女の顔が目の前に。

う、うおお?!

もしか彼女もその気に?!

「ねえ、」

「ははっはい?!」

「君、俺と会ったことあるよね?」

え、それなんて逆ナン?

会ったことなんてありませんでしょうよ。

いや、でも同じ学校なんだから一度は…。

「小さい頃だよ。思い出せない?」

疑問系じゃなくて確定?

会ったこと、ねえ。

「君、増岡だよな?」

はい、そうですとも。

「昔よく、遊んだじゃん。『おか』って呼んでたじゃん。」

え、

おか？

なんか呼ばれてたような気が…。

俺って記憶力ないからなあ。

そんな小さい頃のこと覚えてない。

『泣いてんじゃねーよ、くそばかおか』

あれ。

な、なんか変な記憶が…。

昔よく遊んでたのといえは…。

ゆい、めぐみ、たか。

あ。

「ゆ、い？」

「そう、あたり」

ふわりと、由比が笑った。

思い出した。

昔っから男っぽかった美少女。

いつも俺が泣かされてるとき俺を殴ってた、由比。それと、あんまり笑わなかったか。

あと、あんまし遊べなかったけど病弱そうなめぐみ。

いつの間にか遊ばなくなつて、それで、おんなじ小学校通ってたけどみんな違うクラスになっちゃつて、それからもう話してない。顔、忘れちゃってたよ！

「で、さっきのだけど。」

「う、うん」

「やろうか」

きらきらとした笑顔が綺麗で由比は俺を見ていた。

いきなりの展開のはやさについてけない。けれど、

これからが楽しみだ。

## 日常会話（前書き）

ちよい下ネタ。

## 日常会話

あれ以来、俺と加藤は俺と飯を共にする仲になった。

そうすると変な男も言い寄る。（俺に）

「お前加藤由比とどんな関係なんだよ!？」

どんなって、幼馴染っすよ。  
いやあね。

「あの学年トップと学年ほぼ最下位のお前が一緒にいることなんか地球が割れてもあっちゃいけないことなんだぞ?」

は、学年トップう?

マジですか?!

って、俺がほぼ最下位って言うのもマジですか…。

「って聞いたんだけど」

「そんなことより部員集めだろ、バンドだったらボーカルとギターとドラムとベース。ほら、できそうなやつお前のお仲間にいる?」

無視ですか。  
そーですか。

いーもんいーもん。  
あとで先生にきいてやる。

「まわりにはいないよ」  
「友達いないの？」

コノヤロウ。

「いるよ、たくさんいるよ。もうすれ違った人が全員友達だよ」  
「そりゃすげえ」

もうこの人やだ。

「俺とお前はなんなの？」

なんなのって何が。

「お前はギター？俺は？」

「その俺って言うのやめない？」  
「やだ。俺は何？」

こいつを女としてみないことをここに宣言した。  
かわいくなーいかわいくなーい。

「おいこら、答えろや」

「ボーカルがいいお前は。」

「日本語変。」

クォーターですから。

って関係ねえ。

「俺って歌うまいの」

疑問系で聞けよ。

「うまいよ」

「ふうん」

あれ、もしかして照れてます？

あら、やだ。

前言撤回してやってもいいよ。

結構かわいいところあんじゃん。

このこも人の子！

思わず頭をなでてやりたくなる。

「前から気になってたんだけどさ、」

「なあに？」

思わず猫なで声で答えてしまった。

由比の目が気持ち悪いものを見るような目になった。

ごめんよ。

でもすぐ普通の顔に戻りさっきの質問を続けた。

「その髪地毛なの」

「あれ、ちーさいころいわなかったっけ？」

由比のしゃべり方がだんだん気になってきた。  
なんだ、その日本語を覚えた原始人みたいなしゃべり方は  
気になる。

疑問系を疑問系で聞いてこないのも気になる。  
でも、やじゃない。  
どちらかというと好き。

「じゃあ、」

なんだ、次はどんな質問だ。

「チン毛もオレンジなの」

驚愕の一言。

しかもかわいらしく小首を傾げやがった。（兵器だ）

思わず口を開いてしまった。

どんどん血が顔に集まってくるのがわかる。  
ものすごい体温の俺！

いま髪の毛とおそろいの色してんじゃないかな。  
って俺の髪はオレンジ、おれんぢ…。

「おおお、女の子がそんなこと聞くなよおおおっつっ！…！」  
「気になるもの」

って、このこ！

俺のベルトに手えかけやがった。

「あーっあーっ！…！なにするかね！…！ぎゃー！」

「教えてくれないならしらべる。」

「ちょ、ああ、!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

その日、俺の叫び声は全校生徒に聞かれてしまったらしい。

先生が急いで屋上に来てくれたけど、遅い。

もう見られてしまった。

泣きながらベルトを締めていると、40過ぎの堵陀先生に汚らわしいと言われてしまったし、なにしてたんだ、と担任の佐藤先生に呆れ顔で見つめられた。

屈辱だ。

由比は普通の顔で俺を見つめていた。

このヤロウ。

ああ、このせりふは今日二回目だ。

「オレンジ」

「つつつつつ」

まだ言うか。

n e x t

## ケーオンブ

バンド部のお許しをもらうため、俺たちは放課後学年主任の丸田先生（女性）に相談した。

「バンド部！やりたいです」

「えっ？軽音部のこと？」

「NO！バンド！」

軽音よりかつこいいんだぞ。

まいったか。

…違いがわからないけど。

まあ、バンド部のほうがかつこいい感じするじゃん。

「うーん…。ケーオン部ってあった気がするんだけどなあ…。あ、橋本センセエ、部活表ありますかあ？」

ああ、ありますよ、そう言っただけで橋本先生は丸やんに部活表を笑顔でわたした。

「加藤さん、部活するの？」

橋本先生が加藤に向かって話しかける。

すると加藤は俺の学ランの裾を掴んで俺の後ろに隠れた。  
なんだこいつ。小動物かなにかか。

橋本先生はすこし残念そうな顔をして自席に戻った。

人見知りなのか？

とりあえず俺は加藤の頭をぽんとたたいた。  
たたくってゆうか、まあ、なでたつもり。

「はい、増岡くん、加藤さん、部活表」

丸やんがゆったりした口調と動きで部活表を渡してくれた。

「さんきう」

「どおいたしまして」

部活表を受け取った俺と加藤はとりあえず屋上へ向かった。  
最近10分休みも屋上に来る。

ってそんなはなしはどうでもいんだけど。

「うわ、うちの学校ってこんなに部活多かったんだ」  
加藤が俺のすぐ隣に来た。  
近いよ。

「あるかな、ケーオン」

「おでんクラブなら見つけた」

「そんなクラブ見つけなくてもよし」

並び順が適當すぎてどこにあるかわからない。  
不親切な部活表だ。

「あ」

突然加藤が声を出だした。

「何？」

「ギターの音がする」

え？

「きこえな、ぶっ」

加藤に口を無理やり塞がれた。

静かにしろってこと？

口で言ってくればいいじゃん。

それがいやなら人差し指を口にやってシーとかね。

鼻まで塞がないでよ、息できない。

「聞こえるでしょ」

よくわからないけど、とりあえず耳を済ませてみた。

「あ」

うん、聞こえたよ、加藤。

すごいな、こんな最小の音が聞こえるなんて。

そのギターテクは、とても上手とは言えないけれど、下手でもない。  
でもなんか、わかんないけど、

すげえ。

インパクトがあったわけでもないのに何故かすごいと思ってしまっ

た。

とりあえず加藤さん、手をとって俺を解放して。  
とりあえず加藤の手をたたく。

「あ、めんこ」

めんこってお前。

もつと言い方あるでしょう。

加藤は俺を解放してから、部活表を手についた。

「ねえ、あつたよ」

「そりゃ、どこかでギターがなくてりゃあるでしょ」

加藤に部活表を渡され、文字の場所に指を指された。  
由比が指した場所を見ると、そこには

『Key 音部：たなか さとる』

と手書きで書かれていた。

誰がつけたかわからんが、

どんなネーミングセンスだ。

「多分、この田中センパイだと思うよ」

「そうだね、俺もそう思うよ。」

とりあえず、それを問いにいくついでに、

入部させてもらおうか」

「…『ついでに』なの」

next

入部！

とりあえず、さっきの部活表を返して入部届けをもらうことにした。

丸やんはうれしそうに笑って俺と加藤に入部届けを渡してくれた。

「あー、嬉しいなあ。加藤さん、やっとこういう行事参加してくれるようになったんだねえ」

加藤はまたさつきみたいに俺の後ろに隠れた。

隠れたって無駄だって。何がしたいのこのこは。

先生はその様子をみてくすりと笑った。

「それにさ、」

丸やんの手がふわりと加藤の前髪に触れる。

「最近、まっすぐ前を見ているね。増岡くんのお陰かなあ」

丸やんの手が移動して次は俺の頭をなでた。

そして小声で俺に話しかけた。

「感情表現ができない不器用な子だけど、これからよろしくね。

君が、光になってあげて？」

入部届けを受け取り、Key 音部の部室を聞いてみたのだが、どうやらひとつの教室を使えないらしく、どこかへ移動しながらの部活動なんだそうだ。

とりあえず、音のするほうにあると考え、加藤の指示に従って移動しようと思った。

えーっと、あれだ。

丸やんと加藤は親子か何かなんだろうか。（まあ、年齢的にありえないが）

随分、加藤の事情を知ってそうな口ぶりだったが。

つとゆうか、光とはなんなんだろう。

力になってあげて、そういう意味だろうか。

なれるだろうか、加藤の光に。

俺はそれを聞いてどう思ったのか？

そりゃあ、

なれるなら、なってやりたい

と、思う。

（…ん？）

なな、何だこの展開は。

俺が加藤スキーフラグが立ってるじゃないか。  
そんなことは、断じてないっ。

俺が好きなのはもっと純粹でかわいらしい子。  
こんな下ネタを言うような奴じゃないのだ。  
しかも、こいつ俺の下を毛を見たわけだし…。

「ねえ」

気がつくと目の前に加藤の顔があつて驚いた。

「顔あかいよ」

ええ、そうでしょうとも。

「音、ここから聞こえるよ」

加藤がとある教室の前で立ち止まった。

教室名が書いてあるプレートをふと見上げると、そこには「key  
音部部室」と書いてある紙が張られていた。

だが本当の教室名は理科準備室である。

勝手に張っちゃだめですよ。

「入るの」

「入るでしょ」

扉にてをかける。

ガラリ。

開いた瞬間何故か目の前が真っ暗に。

「…何」

うえのほうから声がして頭を上げてみる。

視界に映ったのは楕円形のめがねをかけた身長170くらいの男だった。

俺が知ってる二年生にこんな人はいなかった。なので勝手に3年生と認

定する。

ふと、また加藤の手が俺の学ランをつかんでいるのに気づいた。  
またですか。

今日は3回目だぞ。

なんて、そんなことは置いといて。

とりあえず目を合わせて数十秒。

メガネ先輩(?)はくるりと後ろを振り返って誰かに話しかけた。

「なんか、いるよ」

なんかとは何だ。

失礼な人だな。

さっきまでギターを弾いてたのはこの人だと思う。  
手にピックが握られているから。

加藤の手が俺の学ランから離れた。

「あ、んたですか。さっきのギター」

おお、こいつしゃべった。

なんて当たり前なんですけどね。

「…ああ。ギターね。俺だけど」

「…そう」

「…なんか、用？」

こいつら似てるような気がする。  
気のせいかな？

「言わないの」

え、あ、そーか。

入部、しにきたんだっけか。

「あの、Key 音部ってだれがつけたんですか」

あ、間違った。

加藤が俺の脚をふんづててます。

ごめん、ボケたわけじゃないんだ。  
気になってんです。

するとメガネ先輩の後ろから妙にテンションが高そうな人が出てきた。

その人もメガネだった。

「あーっ、それ、俺俺っ」

高そうじゃなくて高かった。

「名前は俺じゃねーけどっ、君ら、入部希望かな？」

「あ、はい。そうです」

そういうと後ろのメガネの人はニコっとして笑って俺の肩をたたいた。

「そか、そか！はいんなさいっ」

あっさり、入部。

なんだ、つまらん。

まあ、これからが楽しければいいか。

こいつもいるしね。

n  
e  
x  
t

## 部員紹介

「はい！じゃ、祝 部員4人！というわけで、自己紹介しようか！」  
しばし沈黙。

え、ただ、だれかしゃべれよ。  
っていうか言いだしっぺのあんたが先に言えよ。

ふと、隣に座っていた加藤が立ち上がった。

「加藤由比。2年B組。ボーカル希望」

なんだ、今日のお前はなんだか積極的だな。

加藤が俺をじろりと睨んでいる。  
え、なに、自己紹介しろと？

「あー…。増岡竜平です。ギター希望」

軽い、ほんとに軽い自己紹介だな。

「はあいつ！わかりましたあー。じゃあ3年生の紹介するね。俺の名前は高橋優堵<sup>たかはし ゆうと</sup>。ピアノ。今はこいつと組んでますっ。」

その高橋センパイは無理やり隣に座っていた先輩を引っ張った。

「ほら、自己紹介っ」

メガネ先輩はしばし無言で俺と由比を見つめ、目をそらした。

なんなんだ。

「たなか。田んぼに菜っ葉の歌って書いて、田菜歌 ひろむ 拡」

間違えないでね、田菜歌先輩はそういうとその場から移動して自分のギターをいじり始めた。

こんな、変な先輩に恵まれて俺は大変、たいっへん、幸福、なのか、不幸なのか。

「あ、そうそう。君らね。バンド、何人結成なの？ギター、ボーカルだけじゃあ足りないでしょ」

「え？」

ああ。そうだよな。

俺ら二人じゃ、もの足りないよな。

あといるのは、二人くらい？

ベースとドラム。

そんなことを考えていると、由比が小声で俺に話しかけてきた。

「たかと、めぐみ」

あー。そっか。俺、由比ときたらその二人だよなー。

覚えてないけど。

「この学校にいたっけ？」

「いるよ」

じゃあ、勧誘といつときですか。

「明日、探そ。」

由比はこくりと頷いた。

n  
e  
x  
t

## ドラムリスト 長谷川孝の話

小さい頃は幸福だった。

優しい父親、毎日遊ぶ友人。

その幸福もずつとは続かなかった。

母が父さんを振ったのだ。

『あなたみたいな負け犬、もう付き合ってられないわ。孝まで負け犬にしないで頂戴。』

俺は母親を恨んだ。

『母さんなんて大嫌いだ!!!!!!!!!!』

本当のことを叫んだ。

そのとき、初めて殴られたのだ。

最初は普通の母親のように頬をはたっただけだった。それがだんだんエスカレートしていつて、蹴られ、切られ、最終的にはタバコで肌を焼かれるというレベルまで。

あ那时的母さんは異常だった。

正直な話、今もだが。

そして中学に入学して、虐待はぱったりとやんだ。

「小さいときだめだった分、中学で挽回しなさい。そうしたら許してあげるわ」

何を許すのか。

意味がわからない。

「一位をとりなさい。あんな低レベルの中学で取れて当然でしょう？」

じゃあどうしてこんな中学にいれたのか。

「友達なんかつくっちゃだめよ。そんなもの不必要でしょう？」

どうしてそう決め付けるのか。

母はとにかく俺を縛った。

いままで突き放していたくせに、なぜいまになってこんなにも縛るのだろう。

俺を偉くしてなにか得があるのだろうか。

(…学校でもあの人のこと考えるのやめよう)

どんどん鬱になってゆくから。

そんなことより、俺がもつと気にしてるのは昔の友人のことだ。

なんとなく、予感がするんだ。

『もしかしたら、

突然、母親の声が頭で響いた。

期待なんかしないで頂戴。あなたは何も出来ないんだから、運  
なんか期待しないで。

そうやって、また出てくる。

どんなに俺を縛れば気が済むんだ。

俺だって予感や運にたよったって、いいだろ。

(くそ…)

どんどん自信をなくしてく。

『あなたは駄目だけど、勉強すれば自信なんてすぐつくわよ』

アンタはそういったけど、

勉強したって、自信なんかつかない。

誰かにこう、言ってほしい。

自信なんていらない、と。

でも俺にはもう、そういつてくれる人はいない。

n  
e  
x  
t

## 勧誘

由比が珍しく2・D組（増岡のクラス）にやってきた。  
よお、片手を挙げて軽く挨拶をする。

「あのさ」

「うん？」

「どっちからいくの」

由比はいつも説明もなしに話を始める。

「なんだ、突然」

増岡の返答に由比は眉間にしわを寄せた。

（そんな変な顔せんでも）

「孝と恵。勧誘」

ああ、いつてたっけ、そんなこと。

増岡はパンを一口かじり、考えた。

（どっちから、っていわれても。顔覚えてないし。ここはテキストに答えるか）

「孝、でいいよ」

「ん。じゃあ、昼食たべたら、行こう」

（加藤由比、今日も積極的にしゃべる、行動する）

昨日から感じていることだ。

由比は自分に出会ってからというもの、明るくなったような気がする。

ふと、先生のいった言葉を思い出す。

「ひかりになつてあげて、ね？」

（なれてるのか、光）

そう考えると、やけに恥ずかしい。

自分は由比に必要な存在になれてるのか。

「食べるよ」

「…はい」

昼食をすませた増岡と由比（正確に言うとなら食べていたのは増岡だけだが）は孝探しを決行した。

「孝って何組なんだろう」

「…さあ。聞いてみればいいよ」

何だ、その言い方。

聞けと？

数秒間増岡は加藤を睨み続けていたがその視線に気づいた加藤がにらみ返してきたので視線を加藤からはずした。（ええ、こわかったですよ。悪いですか）

しかたない、加藤の言うとおり、聞いてみるか。

とりあえず近くにいた少年（同い年だけど）に問いかけてみた。

「長谷川孝って何組か知ってる？」

「長谷川？長谷川なら…確か2年A組じゃない？」

適当に選んだ人間だったが、知っててよかった。

「ありがとう、見知らぬ人」

加藤は言わなくてもいい単語を発した。  
見知らぬ人はいらんだろ。

まあ、そんなことはさておき。

とりあえず俺たちは2年A組へと向かった。

2年A組についた。

どうやって探す？と加藤に問いかける。

「俺は、顔知ってるからわかるよ」

加藤は増岡の学ランのすそを引っ張った。

ああ、そのままはいれと。

異様だよな。

こんな二人が普通にはいつていくと。

少し恥ずかしかったが、加藤が落ち着くのならまあいいか。

「失礼しまあす」

教室の扉を開けると、一瞬にして周りが静かになった。

(…エ、何？)

ほんの少しの沈黙が続いたが、そんな沈黙はすぐに消えた。

一人の少年が叫ぶ。

「ま、増岡が女連れてる…！」

(ああ、伊藤じゃないか。1年生のとき一緒のクラスだった。  
ン、待て。

女連れてる？)

ちらりと横を見た。

そこには顔だけが美少女、な大変中途半端な女がいた。

「ち、ちがーうつ！こいつはあ……」

「うそーっ！増岡君、彼女できたのーお？！」

シヨックーとかいう女子の声が聞こえた。

あ、ありがとう、なんていつてる場合じゃない。

「違うつてば。こいつはだね、おんなじ部活の子で……」

「増岡の裏切りものーお！！！！！！」

周りがぎゃーぎゃーと騒いでるのに目もくれず。

由比はすつと、とある男子を指差した。

「孝」

人を指差しちゃいけません。

「ああ、あれ？」

「いこ」

加藤はぐいぐいと増岡の学ランの裾をひっぱっている。

増岡ははあ、とため息をついて、短くおう、とだけ答えた。

「長谷川孝君、だよね？」

ちよつと署まで来てもらおうか、みたいな感じで聞いてみた。

別にふざけていつてるわけじゃない。ほんとにそんな感じで聞いたんだ。

その声に反応して、孝が軽く上を向いた。

「「こんにちわ」」

そのときの孝の反応は大変おかしかった。

目を大きく見開き、頬を軽く赤くし、増岡と加藤をじっと見つめていた。

（え、何その反応）

孝はすぐに下を向いて、小さい声でつぶやいた。

「…何」

（ああー。やばいぞ。交渉不成立かも）

ほんのすこし沈黙が続いたと思ったら、加藤が孝の顔をはさんで上に向かせていた。  
そして一言。

「人と話すときは目え見て話せ」

（お前が言えることかよ）

「なな、な、んつだよ！」

顔を真っ赤にしてまた孝はうつむいた。

「俺たちとバンド組も」

直球。

とまどいとかほんと、こいつはないの。

孝はまた目を丸くして加藤を見つめていた。

「な、」

「組もう」

「なんでだよ」

「やりたいから」

（やっぱ、やなのかな）

半場あきらめた。

どうせこのまま聞き続けてもおんなじ答えが返ってくると思ったから。

（由比もあきらめればいいのに）

じつと加藤と孝の言い合いを見つめた。

だが、加藤はあきらめる様子が一切感じられなかった。

（…意地でも入れる気だ）

加藤は孝の手をとってぐつと握った。

「なっ、」

「組もう」

加藤はじつと孝を見つめていた。

すると、孝は加藤の手を振り払った。

「し、しつこいんだよ！なんだよ、そんなの入ったって、なんか変わるわけ？！救われるわけ？！」

孝は言い終わってから口をつぐんだ。  
しまった、そう言いたげな顔だった。

増岡は孝の発した言葉が気になった。

（救われる、って？）

何かを抱え込んでるのだろうか。  
救われないのだろうか。

「もしかしたら」

加藤が口を開いた。

「もしかしたら。なんか変わるかもしれない。もしかしたら、救われるかもしれない。そう思って、俺も今こうやってバンドやろうとしてるんだ。だから、孝もやってみようよ。なんも、何も自然に変わらなかったら」

加藤がもう一度孝の手を握った。

「俺が、無理やりにも変えて見せるよ。無理やりにも、救ってみせるよ」

加藤は本気だった。

（俺、なんか変えるとか考えてなかったんだけど。もしかしたら、）

『君が、光になってあげてね？』

（もしかしたら、光に変われるかもしれない）

最初は軽はずみで始まった、俺の口が滑って始まったことだけだ。

（すごいことになりそうだ）

「  
…」

孝はまた、顔をしたにむけた。  
だが、次はつぶやかず、大きな声で

「組むよ」

と発した。

n  
e  
x  
t

## キズアト？（前書き）

110日更新しなかったのは新キャラ君のキャラがなかなかつかめないからです

キズアト？

放課後、加藤と増岡が孝のクラスに足を運んだ。

「やつほう。孝くん」

「…げ、何？」

孝は顔を顰めながら増岡を睨んだ。

「睨まなくてもいいでしょーっ。せっかく今日の部活にお誘いしようと思ったのにい」

「はっ？部活、で…？」

「バンド組もうつて言ったでしょ？」

「…部活だったのかよ」

そんなこと少しも聞いてない。

孝は小さくため息をついた。

「部活だよー」

ニコニコとした笑顔がやけに鼻につく。  
どうしてそんなに笑顔なんだ？

「増岡機嫌よすぎ」

突然後ろから声がした。

振り返るとそこには加藤がいた。

（…いつのまに）

加藤は気配なく現れる（様な気がする）

「加藤、気配もなく現れるなよ」

増岡もそう思っていたようだ。

「失礼だ」

加藤の手が増岡の頭部を殴る。

それでも何事もなかったように増岡は孝と会話を始めようとする。

「まあ、こんなところで立ち話もなんですから。部室でも行きましようか」

近所のおばさんかなんかか。

この二人にはツツコみというものがいるのかもしれない。

そんなことを考えていると、増岡の手が自分の腕をつかんでいるのがわかった。

ハツとする。

腕をつかまれることはトラウマになっていた。

ソレが母の暴力の合図だったから。

震えたくないのに体が勝手に震える。

（落ち着け、コレはあの人なんかじゃない）

そう思っただけでも体の震えは止まらない。

「孝？」

震えはさらに止まらなくなった。

声は増岡だが、脳内で勝手に母の声に変換される。

『孝ッ！！！！！！！！！』

やめてくれ。

『本当に駄目な子！本当にッ……！！あんたもあの人と一緒よ……！！私を侮辱してッ……！！』

本当に。

やんでくれ、頼むから。

嫌なことしか思い出せない。

増岡が握っていた手を離れたのがわかった。

それでも震えは止まらない。

（やっぱり、駄目なんだ。どこにいたってあの人を恐れることは変わらない）

バンドなんか組んだって、あの人には許してくれない。

「や、っぱ俺……」

バンドなんか組まない。

そういおうとした。

そのとき。

す、と自分の腕に何かが触れた。

由比の手だった。

（え、）

ただ、それだけ。

それだけのことだったのだが、なぜかものすごく救われた気がした。震えが止まったから。

「大丈夫？」

「…あ、ああ…」

その光景を見ている増岡はぽかんと口を開けていた。

「えーえー…。大丈夫？」

そういつて増岡は孝の肩をつかむ。

「おー…」

（一気に疲れた）

「今日はやめところ」

そういつて由比は孝の手を握り歩き出そうとしていた。

「んなつ！？」

突然握られた右手に孝は動揺を隠せず叫んでしまった。

「帰ろつか」

「そ、その前に手を離せよっ」

「具合悪そうだったからさ」

こいつの行動にはついていけない。

気づくと逆の手にも暖かさを感じた。

増岡までもが左手を握っていたのだ。

「ちょ、おい！」

「「帰ろつか」」

両手に感じる手の暖かさに、なんだかもつ反論する気がつせる。  
(こんなんだれが見たら変に感じるだろうな)

日常に少しは変化あり。

n  
e  
x  
t

## 母親

「入部届け、って親の判とかいるんだよね？」

ふと気づいたことを加藤に聞いてみる。

加藤は目を大きく見開き「そうだよ」と答えた。

それを聞いた孝は

「だ、よなあ…」

「？何」

「…別に」

入部やらなにやら、すべてにおいて親の同意が必要なのはわかっている。

同意してくれなければ何も出来ないような世間である。

（同意なんてしてくれるわけない）

はあ、とひとつため息を吐いた。

家に着くと母親がテーブルに座っていた。

「…あら、お帰り」

まるで帰ってくるのが分かっていたようなタイミングだった。そんな母親の行動に少し吐き気がする。

「ただいま」

母親の香水のにおいがつんと鼻につく。  
気持ちが悪い。

血のつながっている母親なのに本気でそう思ってしまった。

「プリントとかないの？出しなさい」

こういうところは母親らしい。

鞆を探ってプリント類を差し出す。

母親はそれを受け取るとパラパラと読み流した。

「…なに、これ？」

母親の手が一枚のプリントによって止められた。  
入部届けだった。

「それ、は」

一瞬、誤魔化そうとした。

都合が悪くなったときに出る自分の癖だ。

正直に言わないといけないことなのに。

だが、『部活に入りたいんだ』

こんなことを言ったら、きつとまた罵られるだろう。

でも、もう加藤たちと約束してしまったことだ。

いつまでも黙ったままではいられない。

「部活に、入りたいんだ」

ぐ、と拳を握り締める。

何を言われるのか、覚悟した。

「…何を、言っているの」

ほら、やっぱり。

「貴方までそうやって私の言うことを聞かない気なの？」

「あの人と一緒にだわ」

「頭しかいいところがないのに。そんなことやってる余裕あるのかしら？」

「部活なんてしたっていいことないでしょう」

うわごとのように吐き続ける母親の目をずっと見つめた。  
もうなれた。

同じことの繰り返しで。

今はもう殴られることはなくなったが、延々と罵られ続ける。

(うるさい)

自然と、母親を睨みつけていた。

「…なんなの、その顔」

はつとした。

こんな行動、母親を怒らせるだけなのに。  
母親の目から視線をそらす。

(久しぶりに怒らせた)

「ふざけないでちょうだい…。中学に入ってから少しはおとなしくなったと思ったのに」

母親の右手が強く頬をたたいた。

その衝動で床に倒れこんでしまう。

(…久しぶりに、やられるかも)

腹の部分に強く蹴りが入る。

「うぐっ…」

上品そうな母からは考えられない蹴り。

情けない。

自分より背が低い、女性に蹴りを入れられ抵抗もしない。

(いまなら抵抗できるはずなのに)

母はまだ蹴りをやめてはくれない。

足、背中、また腹。

次々と蹴りがくわえられていく。

(昨日今日といい日だったから)

痛さからではない、涙がこぼれた。

(いい日なんて毎日続かないんだ)

わかってた。

わかってたわかってたわかってた。

父親のときもそうだったのに。

あとき、毎日幸福だったのに。

父親がいて、自分と毎日のように遊んでくれる毎日。

それが突然ぽつりと切れて。

わかったのに。

幸福は続くものではない。

毎日続く幸福なんてない。

母親の足が目の前にあった。

ぎゅ、と目をつぶった。

どさり、と物が落ちた音がした。

通学用の鞆だった。

母親の動きが止まる。

音がしたほうに顔を向ける。

「…あの一。ピンポン押しても来ないのに鍵開いてたから」

そこにたっていたのは、加藤由比だった。

こんな状態の母親と俺の姿を見ても見事に無表情だった。

「あー、えー、うん、っと」

加藤が何かを説明しようと手を動かしている。

母親は驚きすぎて声もでないみたいだ。

俺はというと腹を蹴られて動けない。

ふと、加藤と目が合った。

ぱっと目をそらす。

その瞬間、体がふっと立ち上がった。

「…え、」

加藤が俺を背負っていた。

「え、ええええ？」

俺と加藤の身長差はかなりある。

だからそれなりに体重差もあるだろうに、こいつは俺のことを軽々と持ち上げた。

「あの、お取り込み中のところ悪いのですが、こいつ引き取らせていただきます」

母親に向かってそう言い放った。

「え、え、なに」

「走るよ？捕まってる」

俺を背負った加藤は玄関のドアまで猛ダッシュしやがった。

ドアは元から開かれていたらしく、すんなり家から脱出できた。

（ドンだけ体力あんの、こいつ）  
体重差も身長差もある自分を背負って走れる加藤が本当にすごいとおもった。

「よいしょ、っと」

加藤は孝をとある家の前でおろした。

「お、まえどんだけすごいんだよ」

「ナニが？」

「よく、俺のこと背負って走れたな」

「ああ、軽かったし」

『軽かった』

そんなわけがない。

常識はずれの体力だ。

ふと、加藤の足に目が行く。

「え」

驚くことに、加藤はニーソックスのまま走っていたのだ。

「おま、靴は」

「ああ。ここ」

そっぴいながら目の前にある家を指差す。  
表札には「加藤」と記されていた。

「…お前の家？」

「そ」

加藤が鍵を開ける。

「入って」

ぐいっと孝の腕をひっぱる。

「な、なに？」

「手当て、しないと」

とんとん、と自分の頬をたたき表現する加藤。  
そしてぱたと走って他の部屋に入っていた。

（…おどろいた）

まだ心臓がなっているのが分かる。

その下をさわり、先ほど蹴りを食らった腹をなでる。  
鈍い痛みがじわりと襲ってきた。

（まさか、加藤が来るとは）

さっきの光景がフラッシュバックする。

といっても加藤の登場してきた場面だけだ。  
すごかった。

只それだけしか言えない。

（うれしかった、な）

「孝」

びくつと体が震えた。

「学ラン脱いで」

といいつつ加藤はボタンを外していた。  
矛盾してる。

学ランのボタンを外されたあと、Yシャツのボタンも外される。  
「ちょ、おまえ…」  
「何」

なんのためらいもなく外すものだからもうどうでもよくなった。

「どうやって治療すればいいんだろ。お腹」  
「…湿布はりゃいいんじゃない」  
「ああ、そうか」

そいつって救急箱から湿布を取り出し孝の腹に貼る。

「…さんきゅ」  
「いーえ」

学ランを着なおし、とりあえず一息つく。

「…この家、誰もいねーの？」  
「俺とお前がいるだろ」  
「俺ら以外に、だよ」

ああ、と手をぽんとたたいて漫画みたいな表現をする。  
天然なのか、なんなのか。

「いないよ？」  
「親は？」

「親二人海外で仕事してるの。いつもはお手伝いさんが来てるんだ

けどまだ来てない」

お手伝いさん。

そんなのを雇ってる人初めてみた。

テレビや小説などでよく見るけど、実際見たことない。

「…す、ごいな」

「俺料理も掃除も出来ないから」

ああ、なんかそんな感じ。

と言おうとしたが怒られそうだったからやめた。

「あのさ、」

孝がぼーっと家の中を見ていたら突然加藤が口を出した。

「話てくんない？さっきの」

急に加藤の顔が真剣になる。

ああ、やっぱり、はなさないとだめか

n e x t

むかしばなし。

昔。

そんなに昔ではないけど、約5年前。  
俺は3人家族だった。

俺と、母と、そして父。

母と俺は昔から仲が悪かった。  
俺と母の間に父が入っていて、やっと「家族」でいれた。

父はやさしかった。  
休日には俺と遊んでくれたし、平日にはいつも俺が学校から帰ってくるのを待っていてくれた。  
父は無職だった。

それに気づいたのは真夜中、目が覚めたとき、母が父に離婚を申し付けたときだった。  
『あなたのような負け犬と、何で結婚したのかしら。昔はちゃんと職に就けてたのに…。出てって頂戴。孝まであなたみたいにしたくないわ』

次の日、父の物と一緒に父はいなくなっていた。  
俺を残して。

『お前なんて嫌いだ！！！！！』  
母に叫んだ言葉だった。  
後悔なんてしなかった。

『母親になんてこと言うの!』  
ぶたれた。

普通の親がするような行為ではなく、暴力。  
ぶつただけでなく、蹴ったり、煙草をおしついたり。

いわゆる、虐待。

小学校の頃はほとんど毎日。  
でも中学にあがってぱったりやんだ。  
俺の勉強の成績を見てやめたんだとおもう。

「つとここまでで質問は?」  
なんてちよつと冗談を言ってみた。

「…」  
加藤は黙り込んだ。

本当は誰にも話す気はなかったんだ。  
でも、加藤にははなしたかった。  
俺の過去、俺の思い。

「なんでやめたの」  
やつと加藤が口を開いた。

「なにを?」  
「暴力」

極力小さな声で加藤は言った。  
結構優しいんだな。  
なんて思った。

「んーとなあ。多分、優越感？」

「…ゆーえつかん」

「うん。自分の子供はこんなにおできになるのよーっていう、さ」

「…孝、なんか、キヤラ違うよ」

加藤の手が俺の手を握った。

その手を握り返してやる。

人の手を握ったり握られたりするのとはどれくらい久しぶりなんだろう。

安心するもんだなあ。

「今日は、うちに、とまりなよ」

「うえっ？」

いや、それはまずいんじゃないかい？

だっていちおう、ふたりつきりになるのでは。  
言おうとするけど声が出ない。

「あ、う、」

「いいの、泊まって行つて。家に帰すわけには行かないもん。またぶたれたらどうするの」

至近距離で顔を見つめられて照れる。  
こんなに整った顔をしてたんだ。

「…じゃ、あ泊めてくれ」

「うん」

こいつといると、妙に落ち着くんだ。

n e x t

## むかしばなし。(後書き)

作者名を変えました。

加藤由良、改めまして伊東ゆさです。

友人に「主人公とお前の名前にてねえ?」…もしかして加藤由比つてモデルおまえ?美少女ってwwwwちょwwwwくはwwww」と笑われました。

えーっと、友人よ、違います。

ただ名前がにているだけです。

そういわれるのが嫌になったので作者名変更です。

よろしく願います

伊東ゆさ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1755d/>

---

スタ バン

2010年10月9日12時37分発行